

観光教育に特化した産学連携による リアルビジネス授業の実践に関する研究

—共栄大学 World Run の実践—

A Case Study of Tourism Education Real Business
Lecture Based on Industry-University Collaboration

神末武彦・平井宏典・平田博紀
Takehiko KOZUE・Hironori HIRAI・Hiroki HIRATA

概要

本稿は共栄大学、国際経営学部の特別講義「RB (Real Business) 型授業」の実践と教育効果に関する実証研究レポートである。本年度は昨年度のスポーツビジネス型授業に追加し、観光ビジネス教育に特化した産学連携型授業、World Run の新たな取組みとなった。

大学と産業界の間に存在する人材育成に関するギャップ、大卒の就職率の低下、コミュニケーションスキルの不足など多くの課題を新卒学生に関し抱えている。大学教育において、本学が提唱して「社会学力」の育成を目指したプログラムの有効性について、昨年実施したスポーツビジネス型授業「Spolas」と比較検証し、課題と展望を抽出した結果この形態の授業の必要性と先端性について考察した。

キーワード：RB (Real Business) 教育、産学連携、グループワーク、観光ビジネス、社会学力

Abstract

This research paper is to examine the educational effect of the new RB (Real Business) lecture course based on Industry- University Collaboration. This year in addition to the sports business based lecture “Spolas”, we have applied a lecture course “World Run”, which aims to study the Tourism Industry.

The environment hiring new University Graduates has been changing dramatically. The big gap of understanding the educational needs required from the Industry and what Universities provide, decreasing of the job hunting rate and lack of communication skills are some of the topics. This paper indicates the validity of lecture comparing with the lecture that had been provided last year concluding that the lecture will fulfill the needs of “Social Fundamental Skills” which Kyohei University has been strongly proposing.

Keywords:RB(Real Business) Lecture, Industry-University Collaboration, Group Work,
Tourism Business, Social Fundamental Skills

目次

1. はじめに
2. 実学的専門教育としての World Run
 - 2.1 共栄大学 RB 教育
 - 2.2 観光ビジネスに特化した実学的専門教育
 - 2.3 World Run の特徴
3. World Run の教育効果
 - 3.1 World Run の位置づけ
 - 3.2 授業評価の検証
4. RB 教育の課題と展望
 - 4.1 World Run の課題
 - 4.2 Spolas との比較
5. 終わりに

1. はじめに

本学において、昨年度（2009年度）開講された特別講義「Sports Business Atlas（以下、Spolas（スポラス）とする）」は西武ライオンズとの産学連携により実施された⁽¹⁾。Spolasの特徴は「産学連携によりビジネスの現場を大学に設け、学生が主体的にビジネスを体験する」ことである。Spolasでは、大学における一般的な学習スタイルである座学を中心とした理論学習では修得が困難な実務的知識・スキルについては現場の雰囲気も体感できる。この講義のあり方は履修生による授業評価アンケートでも「成長を実感できる」と高い評価を得た（神末・平井，2010）。

このSpolasは本学が掲げる社会で生き抜く実践力「社会学力」の向上を目指す「RB（Real Business）教育」のプログラムの第一弾として開講した。本稿は、Spolasに続く、RB講義の第二弾となる「World Tourism Learning Atlas（以下、World Run（ワールドラン）とする）」について、講義およびプロジェクトを詳述するとともに、授業評価アンケートを基にWorld Runの教育効果を検証する⁽²⁾。そして、昨年度のSpolasの課題とWorld Runの課題をあわせて考察することで、本学独自のRB教育のさらなる発展に資するものとしたい。

2. 実学的専門教育としての World Run

2.1 共栄大学 RB 教育

World Run は、Spolas 同様、RB 教育のプログラムの一環として開講している。RB 教育は、本学が健学の理念として「社会学力」の向上を目的として 2009 年度から新たに開講された特別講義群である。

今日、大学教育は転換点にあるといえる。産業界は、新卒社会人に対して「即戦力」としての能力を求める一方で、従来型の大学教育ではその要求に応えられてはいなかった。このミスマッチを解消するために本学が新たな教育プログラムとして創設したのが RB 教育である。その特徴は以下の 3 点が挙げられる。

①産学連携

RB 教育のプログラムはすべて産学連携を基本として、企業と大学が提携し、ビジネスの現場を実体験・学習できることがプログラム作成における重要な指針となっている。提携企業は、履修生が業界トップクラスのビジネスの現場を体験できるように、当該産業においてある一定の事業規模や認知度があることを選定の基準としている。例えば、2009 年度の Spolas では 2008 年日本リーグを制した「埼玉西武ライオンズ」、2010 年度の Spolas では数あるサッカークラブの中で 18 チームのみのトップカテゴリー J1 所属の「大宮アルディージャ」、さらに 2010 年度の World Run では後述する業界大手の「近畿日本ツーリスト株式会社（以下、「Knt!」とする）」といったクラブや企業と提携している。

②グループワーク

社団法人日本経済団体連合会（以下、「経団連」とする）が継続的に実施している会員企業に対しての「新卒者採用に関するアンケート調査」では 5 年連続で「コミュニケーション能力（81.6%）」が 1 位となっている。続いて 2 位は「主体性（60.6%）」、3 位は「協調性（50.3%）」である⁽³⁾。このアンケート調査結果からも分かるように、ビジネスの現場では「いかにチームとして円滑に仕事を進められるか」が重要といえる。この点を考慮し、RB 教育のプログラムではすべての講義でグループワークが導入されている。具体的には、講義開始段階の履修生同士のコミュニケーションを図るための小グループから、実際にビジネス（企画）を進めていく段階でのプロジェクトグループまで、実際のビジネスに近似した様々な規模のグループワークを経験できるよう設計している。

③主体性

RB 教育のプログラムにおいて、中核となるプロジェクトの意思決定は学生の裁量を最優先できるように自由度を高く設計している。例えば、Spolas の場合は「オリジナルグッズの企画販売およびフリーペーパーの作成」、World Run の場合は後述する「ウエディングおよびツアー」について、基本的に企画内容がどのような形になろうとも学生の自由に

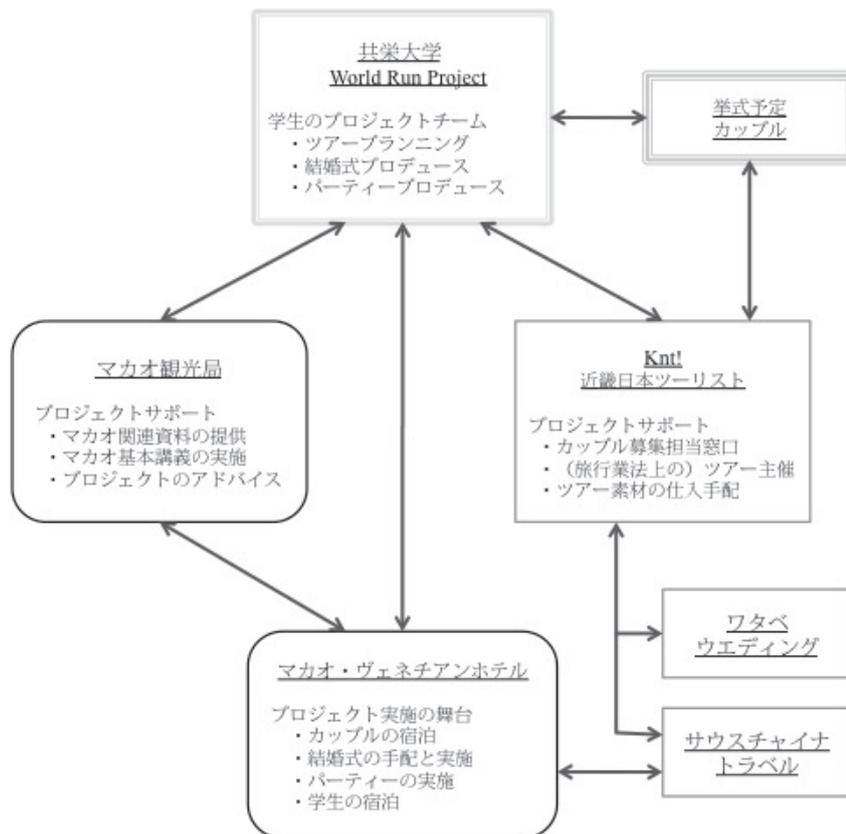
なっている。事前に決められたプログラムに沿って粛々と業務を行なうのではなく、学生の自由な発想で主体的に関与できるように一連の流れ（講義およびグループワーク）が設計されている。

RB教育は、以上の3点を各特別講義（Spolas および World Run）のプロジェクトを設計する上で重視し、いかに実際のビジネスに近似した状況で社会学力を修得できるか検討している。

2.2 World Run における産学連携体制

共栄大学国際経営学部はビジネスキャリアコース、観光ビジネスコース、会計ファイナンスコース、スポーツビジネスコースの4つのコースを展開しており、World Run は基本的に観光ビジネスコースの学生を対象にした特別講義となっている。履修選考において他コースの学生も履修することができるが、履修希望者が定員を超えた場合、その優先順位は観光ビジネスコースの学生が高くなる。このことは、その学習内容がツアープランニングとウエディングという観光ビジネスに特化したものになっているからである。その高度で専門的な学習プログラムを実現するための組織として2010年度のWorld Run では下図のような産学連携体制を構築した。

図 2.1 World Run における産学連携体制



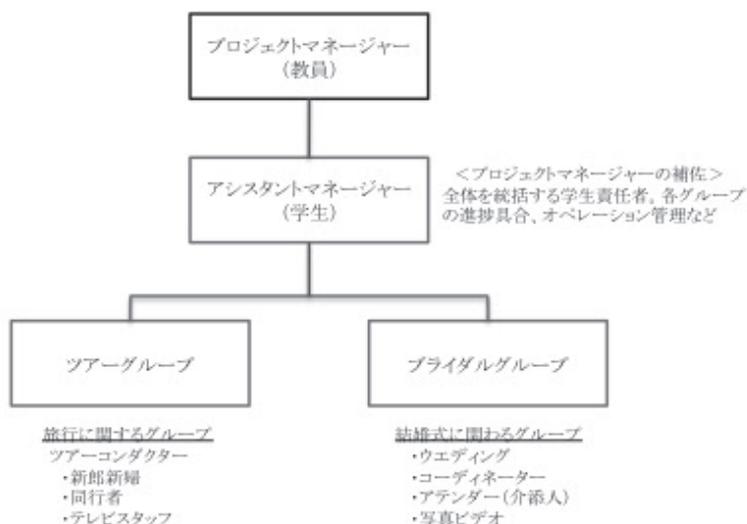
まず、プロジェクトの舞台となる「マカオ」の選定事由は、都市の魅力や地理的利点のみならず「マカオというディステーションに寄与すること」という大きなテーマがある。マカオはカジノによる売上がラスベガスを追い抜いたことから世界有数のギャンブルの街として認知されているが、旧ポルトガル植民地の影響が色濃く残る西洋と東洋の文化が混在した世界遺産の街でもある。しかし、日本では観光地としてのマカオの認知度は決して高くない。現段階において、海外ウエディングの地としてはまったく認知度のないマカオにおいて、World Runによる実験的なプロジェクトを通して実際の旅行商品として流通・販売できるパッケージを作るところまでが産学連携による講義の真の狙いであるといえる。

そして、高い教育効果に加え、上述の狙いを達成するためのパートナーとなる企業は、プロジェクトの舞台となるマカオ・ヴェネチアンホテル（挙式会場および宿泊地）だけではなく、ツアーに関しては日本の大手旅行会社「Knt!」およびマカオの現地ランドオペレーター「サウスチャイナトラベル」、ウエディングについては海外挙式および婚礼衣裳最大手「ワタベウエディング株式会社」と提携した。提携企業には講師派遣からフィールドワーク（現地視察・模擬演習）まで幅広く支援していただいた。

2.3 World Run の授業構成

World Run の授業では全員が最低限修得すべき知識を座学にて習得し、情報共有を前提としたグループワークを実施した。World Run では業務に応じて「ツアーグループ」と「ブライダルグループ」という2つの枠組みをつくと同時に、両グループがいつでも他のグループの問題解決に対応できるようにアシスタントマネージャー制度をはじめとする連絡体制を構築した（図 2.2）。また、学生が所属することになる組織は企業内における組織と同様の命令系統を意識した構成となっており、よりリアルにビジネスを実施できる場を提供している。

図 2.2 World Run グループ編成と各グループの役割



RB教育の特徴のひとつとして前述の通り「グループワーク」が挙げられる。しかし、RB教育のグループワークは、実学的専門教育に立脚したものであり、学生が自らの思いつきやアイデアを単純に形にしていくものではない。World Runは2010年度前期に2時限分を1セットとして下表の通り授業を進行し、マカオのプロジェクトは9月12～15日（3泊4日）のスケジュールで実施した⁽⁴⁾。

表2.1 講義スケジュール

1	オリエンテーション（授業概要、応募、面接）	講義説明、履修選抜面接
2	授業の進め方、心構え、婚礼の基本等について	ビジネスマナーの徹底、規定作り
3	ディスティネーション理解 マカオについて	マカオ観光局における講義
4	マカオのツアープランニング	KNT!による講義
5	婚礼ビジネス概論	ワタベウエディングによる講義
6	海外挙式ビジネスの理解	ワタベウエディングによる講義
7	婚礼衣装の理解（フィールドワーク）	東京グランドプラザ見学（衣装）見学
8	ヴェネチアンホテルについて（宿泊・挙式会場）	挙式会場、宿泊についての講義
9	国内ウエディングオペレーションの実際（模擬挙式）	アフィーテ葉山にて模擬挙式
10	危機管理演習+カップル決定	学生によりカップルの選定
11	ツアーオペレーション	サウスチャイナトラベルによる講義
12	グループワーク	グループと担当を発表、課題抽出
13	グループワーク	各種企画のスケジュール決め
14	グループワーク	企画案の検討
15	グループワーク	企画案の発表

この講義スケジュールにみられるように、カップルが決定するまでの間まで前半部分はウエディングとマカオのツアープランニングの知識修得に主眼が置かれている。実際のウエディングやツアープランニングには新郎新婦の要望を聞く必要があり、カップルが決定するまでの間に必要な知識を座学形式で学習することに注力するスケジュールになっている。そして、講義の後半部分は座学で修得した知識を活用し、実際に新郎新婦の要望を汲みながらツアーと結婚式を作っていくグループワーク（実践）中心のスケジュールとなっている。

3. World Runの履修効果の検証

3.1 World Runの位置づけ

近年、様々な教育機関において行われている産学連携型の授業では、既存の大学が研究活動を通して得た「知」を産業界に提供し「実」を得るという形だけでなく、産業界の「実」を大学が新たな「知」として取り込む流れが窺える（森川，2010）。こうした産学連携型の授業では、主にケースメソッドやビジネスゲームといった手法により、学生が自発

的に発言することやコンピュータを操作することによって得られる“追体験型の授業”が展開されるという点で、教員が一方的に説明する既存の座学講義からの転換が図られている。

一方、World Run は、先に述べたとおり、既存の産学連携型の授業とは異なる内容を意識的に取り入れ展開した。具体的には、これまでの産学連携型の授業にある追体験型ではなく、実際のビジネスの中で直面する初めての経験に適応するために、なにが必要になるのか、どのような行動が求められるのか、という点を学生が考える環境づくりに主眼を置いた授業といえる。つまり、本学の建学理念の一つ「社会学力」の養成を体現するべく、学生の主体性を引き出すことこそ World Run の目的となる。ここでは、World Run が主体的な行動習慣の養成に貢献したかを、学生による授業評価アンケートの結果を通して検証していく。

3.2 授業評価の検証

(1) World Run の授業評価

本学で行われている授業評価アンケートは、学生が自らの授業への姿勢を評価する 5 問（以下、学生の状況とする）と授業の質を評価する 13 問（以下、授業の状況とする）の計 18 問である（表 3.1）。

図を見ると、問 1 の出席や問 5 の興味・関心といった点で最高評価を得ており、授業の満足度を示す問 6・14・15・18 が次いで高評価を得ていることがわかる。問 4 の授業の難度が本学の全科目の平均的な評価値とほぼ変わらない中で、こうした結果になったことは、本授業の内容が学生に好意的に受け取られたことを象徴するものといえるだろう。

一方、問 11「板書の文字は読みやすいですか」と問 16「この授業はシラバスや授業計画に沿っていましたか」の 2 つの項目が他の項目に比べて若干低い。先に挙げたとおり本授業の構成が、学生自身に進捗を実感させながら、その時々で必要な知識を逐次専門家が提供するという形を取った結果と判断できる。

(2) 全科目平均評点との比較

全科目との平均評点を比較すると、4 つの問（問 2・5・8・13）において顕著な差が確認できる（表 3.2）。中でも最も大きく差が生じた問 2 は予習復習に関する質問である。

World Run では、初期段階に理論学習を集中的に行ない、その後グループワークによって各種プランニングへと移行する構成にあった。学生にとって、理論学習は毎回新たな“知”との出会いであり、新鮮さもあっただろうが、提供される膨大な量に対応していくことができなければ、目的を達成することができない。こうした環境の中で、提供される“知”に向き合い主体的に授業に参加する姿勢が自然と身に付けられたのだといえる。

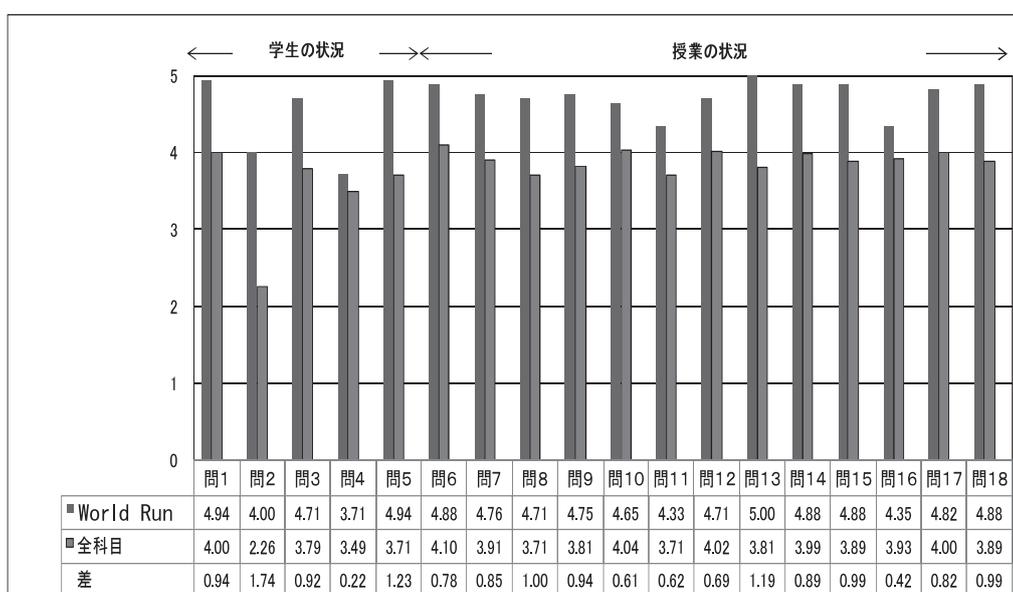
このことは、学生が主体的な行動を促されたと感じている問 8「教員は考えさせ、発言や質問をするよう促していましたか」に差があることでも確認できるだろう。

問4にある授業内容の難度が全科目平均評点とほとんど変わらない中、こうした結果が導出されたことは、本授業の構成が学生の持つ本来の主体性を発揮させ、授業参加への誘因となっていたことがうかがえる。

表 3.1 授業評価アンケート項目と World Run の評価点別回答数

問	質問内容	回答数						
		5	4	3	2	1	回答不可	無回答
学生の状況	1 あなたのこの授業への出席率は何の程度でしたか。(調査日現在)	16	1	0	0	0	0	0
	2 あなたはこの授業を受けるにあたって予習又は復習をしていますか。	5	7	5	0	0	0	0
	3 あなたは、この授業で教員の話に集中し理解しようとしていましたか。	12	5	0	0	0	0	0
	4 あなたにとって、この授業はやさしかったですか、難しかったですか。	2	9	5	1	0	0	0
	5 あなたはこの授業に対して興味・関心を持ちましたか。	16	1	0	0	0	0	0
授業の状況	6 教員は、授業に対して十分な熱意をもって講義していましたか。	15	2	0	0	0	0	0
	7 教員の話し方・説明はわかりやすいですか。	13	4	0	0	0	0	0
	8 教員は考えさせ、発言や質問をするように促していましたか。	12	5	0	0	0	0	0
	9 教科書は役に立っていますか。	3	1	0	0	0	13	0
	10 レジュメ(講義概要)・配布プリント・資料などは有益でしたか。	12	4	1	0	0	0	0
	11 板書の文字は読みやすいですか。	5	6	1	0	0	5	0
	12 講義に利用されたパソコン・ビデオ・テープレコーダ等の教育用機器は十分に機能していますか。	12	5	0	0	0	0	0
	13 教室内の私語について	17	0	0	0	0	0	0
	14 教員は授業環境の整備(私語の注意等)に気を配っていましたか。	15	2	0	0	0	0	0
	15 教員は質問などに対して、適切に答えていますか。	15	2	0	0	0	0	0
	16 この授業はシラバスや授業計画に沿っていましたか。	11	2	3	1	0	0	0
	17 授業中に出示されたレポート、確認テストなどの課題は授業目標や内容にそくしたものでしたか。	14	3	0	0	0	0	0
	18 授業の到達目標に照らして、あなたはこの授業に満足していますか。	15	2	0	0	0	0	0

表 3.2 World Run と全科目の平均評点の比較



注：差=World Run 平均評点-全科目平均評点

4. World Run の課題

4.1 World Run の課題

授業評価アンケート結果の全科目平均点との比較によって顕著にみられる差については World Run という教育プログラムを作成する段階から想定していることであった。World Run ではグループワークを導入していることから、問 2「あなたはこの授業を受けるにあたって予習又は復習をしていますか」、問 5「あなたはこの授業に対して興味・関心を持ちましたか」、問 8「教員は考えさせ、発言や質問をするように促していましたか」の 3 点は、学生が主体的に授業に臨む RB 教育の特徴として強く意識して講義内容・方法を検討したところである。特に、予習または復習に関してはグループワークが本格化する後半部から促すのではなく、座学中心の前半部から自己学習の必要性を意識づけさせていった。

授業評価アンケートには表出しにくい部分での課題といえるが、「学生のモチベーション管理」である。World Run は前期の約 6 ヶ月間、自己学習もグループワークも含め修得しなければならない知識・スキルの量が非常に多い。また、実際の新郎新婦のウェディングおよび海外ツアーを実施するので、本物のビジネス同様その責任は重大であり失敗は許されない。そのような環境の中で、学生が 4 月の履修開始から 9 月の本番まで高いモチベーションを維持し続けるのは困難だといえる。今回は、実践的知識の修得に関して提携企業である Knt! やワタベウエディングの協力を得て講師派遣やフィールドワークに大学外へ出る等により学習環境に変化を与えたりすることでモチベーションを高く保てるよう配慮していった。

4.2 Spolas との比較

本稿に先立ち、昨年度実施した Spolas について考察した小稿においてもその課題を検討した（神末・平井，2010）。本節では同じ RB 教育のプログラムである Spolas と World Run の課題を比較してみたい。まず、昨年度実施した Spolas は、①理論学習とワークショップのバランス、②適正な時間配分、③学生のモチベーション管理、④評価基準の 4 点を課題として挙げた。

まず、①理論学習とワークショップの課題については、World Run の授業構成として前半部は座学を中心とした理論学習、後半部はグループワークを中心とした実践としたことでバランスをとることができたと考えられる。Spolas も同様に 5・6 限の連続した授業時間であったことから、5 限を理論学習として 6 限をグループワークのように両者の関連づけを行なっていった。例えば、5 限は市場分析、6 限は分析に基づくコンセプトづくりのような形式である。このことから学生が実際のビジネスを行ないつつもしっかりと学習

することもできる授業構成であったと考えられる。

次に、②適正な時間配分であるが、このことについてはまだ学生の負担は大きいと考えられる。学生自らビジネスを行なうということで、必要不可欠な知識・スキルは非常に多い。World Run をひとつの講義として考えた場合、その負担は学生のみならず教員にとっても大きい。学生の負担を減らすにはある程度グループワークの部分で教員・提携企業サイドがプロジェクトの枠組みを決めることも考えられるが、その場合が学生の主体性・自主性を損なうことになる。この適正な時間配分（学生の負担）という課題は今後も検討していかなければならない問題であるといえる。

③のモチベーションに関しては前節にて言及した通りである。④評価基準についても課題が残るが、今年度は主担当・副担当・提携企業担当者全員で多角的に学生を評価することで、その評価に客観性をもたせるように配慮した。評価については次年度以降 RB 教育特有の客観性のある指標を基準として確立できるように努めたい。

5. 終わりに

真の産学連携とは単に企業の力を借りて大学教育をより良くするものではなく、提携企業と大学とが win-win の関係を構築することであるといえる。その意味で World Run は、「マカオというディスティネーションに寄与すること」をひとつのテーマとし、旅行または海外ブライダルにおける実際のビジネスも強く意識したプログラムであるといえる。今回の World Run のプロジェクトを契機として、今後はすべての RB 教育のプログラムで win-win の関係を構築することを目指していきたい。このことについては、また RB 教育のプログラム開発が進んだ段階で稿を改めて考察したい。

注

- (1) 「スポラス／Spolas」は、共栄大学の登録商標である（商標登録第 05320502 号）。
- (2) 「ワールドラン／World Run」は、共栄大学の登録商標である（商標登録第 05320501 号）。
- (3) 社団法人日本経済団体連合会「新卒者（2010 年度 3 月卒業者）に関するアンケート調査結果」入手先〈<http://www.keidanren.or.jp/japanese/policy/2010/030kekka.pdf>〉（参照 2010-11-10）。
- (4) World Run は毎週木曜日 5・6 限の 2 時限分を 1 セットとしている。

参考文献

- 神末武彦・平井宏典、「産学連携の新たな実践型ビジネス学習－共栄大学 World Learning Atlas の実践－」、『共栄大学研究論集』、共栄大学、2010、pp.79-91.
- 中山健、「産学連携教育としての大学インターンシップ－動向・現状・課題－」、『東京大学大学院教育学研究科紀要』、東京大学大学院教育学研究科、2010、pp.183-190.
- 森川佳世、「女子短期大学における航空会社との産学連携を生かした教育プログラムに関する

る考察—実践的なマインド教育の一例を中心にして—, 『埼玉女子大学研究紀要』 第21号, 埼玉女子短期大学, 2010, pp.347-361.

柳田純子, 「産学連携プロジェクトと連動した演習教育によるキャリア形成支援—課題解決型学習に参画した経営系学生のキャリア形成過程の考察—」, 『東京情報大学研究論集』 Vol.12 No.2, 東京情報大学, 2009, pp.9-25.